

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	大口（大森） 美佐 【人間発達科学専攻 平成25年度生】	要 旨
論文題目	現代日本の若者はいかに「恋愛」しているのか —首都圏の高学歴・正規雇用者の場合—	<p>日本では 1990 年代以降、長期的な少子化傾向を背景として若者の結婚難及び恋愛離れが問題視され、若者たちはなぜ恋愛しないのかが問われるようになった。しかし、若者たちは決して恋愛や結婚を忌避しているわけではない。本論文では、調査対象を首都圏在住の高学歴・正規雇用者の 20 歳代男女に絞り、かれらの恋愛への意味づけと恋愛をめぐるコミュニケーションのありようから、若者たちはいかに恋愛しているのかを探ることを目的とした。分析資料は、5 グループに編成された 22 名の男女によるフォーカス・グループ・ディスカッション (FGD)、そしてこの FGD への参加メンバーの内 12 名に対する半構造化インタビューにより得た。</p> <p>本論文の主要な知見として、次の 3 点が挙げられる。第 1 に、調査対象者たちの「告白」から「付き合う」関係への展開や「別れ」の局面において、失敗や傷つくことを避ける合理的でリスク回避的なコミュニケーションがみられた。またそこでは、付き合う前にあらかじめ情報を得る、互いの距離を調整するなどを目的として、ICT の機能が存分に活用されていた。第 2 に、恋愛と性の関連に注目すると、「付き合う」という関係は性的な排他性をもつ制度的な関係だとみなされ、また、男女ともに性関係のイニシアティブや関係維持には男性の責任がより重いと認識されていた。それゆえ、その責任の引き受けを回避するため、性関係それ自体を避ける、あるいは双方とも了解済みのセックスフレンドという意味づけを与えるなどの方法が採られていた。第 3 に、男女ともに結婚年齢を意識するようになると、「恋愛のための恋愛」から「結婚のための恋愛」へと恋愛の意味づけが大きく書き換えられる。かれらにとって結婚は、出産・子育てと分かちがたく結びついており、出産の期限が意識されると、リスク回避のために恋愛市場から遠ざかっていたものが再び回帰してくる様子もみられた。かれらにみられる子育てを最重要課題とする恋愛の位置づけには、階層的再生産のメカニズムが埋め込まれていた。</p> <p>本研究の意義は、次の 3 点である。第 1 に、従来の歴史研究、メディア分析などに偏っていた恋愛研究に対し、恋愛関係の相互作用性それ自体に注目した質的研究の成果は貴重だといえる。第 2 に、近代家族を支えてきた「愛—性—結婚」の三位一体が解体したといわれながら、不分明であったその内実に詳細な考察を加えることができた。第 3 に、調査対象者を高学歴・正規雇用の男女、すなわちライフスタイル選択において個人化・多様化する資源をもつ人々に絞ったにもかかわらず、かれらが「結婚のための恋愛」という画一的な指向性をもつようになる様を階層的再生産の観点から考察できた。これらの点において本研究の学術的意義は大きい。</p> <p>以上から、本論文は現代日本の若者たちの恋愛をめぐる行動と意識の内実に深く迫る、オリジナリティ豊かな作品であると評価できる。</p>
審査委員	(主査) 教授 藤崎 宏子	
	教授 坂本 佳鶴恵	
	教授 杉野 勇	
	教授 小玉 亮子	
	准教授 青木 紀久代	